

## 若い女性の育児に対するイメージと少子化との関係

専攻科 尾 台 安 子

Yasuko ODAI

### 1. はじめに

急速に進行する高齢化社会は、今や大きな社会問題となっている。この高齢化は、平均寿命の伸長と少子化がその要因になっている。少子化の問題は高齢化の問題と共に対策を考えなければならない急務な状況である。わが国の合計特殊出生率は急速に低下し、人口を長期的に維持するために必要な水準を大幅に下回る状況となっている。この少子化現象の問題として論議されるのは、労働力人口の減少等による経済問題であり、年金財政の破綻等の福祉問題であることが多かった。しかし、少子化の問題は将来の高齢化社会を担う子どもと子育ての問題を抜きにしては考えられないものである。少子化の要因とその背景をみてみると、未婚率の上昇（晩婚化の進行と生涯未婚率の上昇）があげられる。さらにその背景は育児に対する負担感、仕事との両立の負担感等が女性の未婚率を上昇させているといわれている。そこで育児の負担感に着目して、若い女性は育児に対してどのようなイメージを持っているのかということに興味をもった。

イメージとは、「心の中に思い浮かべる像や情景。ある物事についていさぐ全体的な感じ。心像。」（広辞苑）であるという。また、イメージは「具体的、実証的な知識によるよりも直観的、感情的、印象によって形成されるものであり、漠然としていながら行動を規定する力が強いといえる。」と、今井は述べている。イメージは漠然としていながら行動を規定する力がある。人の行動は漠然とした価値観や直観的なもの、感情的なものに大きく左右される。育児に対するイメージがマイナス的なものが多いとすれば少子化の要因の負担感につながっていくと考えられる。そこで、最近の平均初婚年齢にはまだ間のある20歳付近の若い女性の育児に対するイメージ調査をした。その結果を分析し、少子化との関係をとらえてみた。

### 2. 研究方法

#### 1) 調査対象者

S大学及びM短大の女子学生171人。

#### 2) 調査期間

平成8年～平成10年

### 3) 調査方法

教室内で、無記名で調査用紙を配布し、その場で記入してもらい、記入後直ちに回収する。

### 2) 調査内容

対象の属性については、年齢・家族構成・兄弟関係・両親の共働きの有無・育児に対する考え方の親の影響・将来の希望する職業・仕事続行の意思・乳児に接する機会を問う内容とした。育児に対するイメージ調査は、セマンティック・ディファレンシャル法(以下SD法と略す)を用いて、マイナスのイメージとプラスのイメージとを対にして、30項目のの形容詞対を作成して、7段階評定をさせた。調査用紙は表1に示した。

表1

#### 育児に対するイメージ調査のお願い

核家族化が進み、子育ては夫婦だけでやっていかなければならない家庭が増加し、相談する相手もなく、地域とのつながりも希薄な中で、育児ノイローゼに陥る母親が多くなります。

そこで、現代の若い女性達は、育児というものをどのようにとらえているかを明らかにすることにより、今後の参考にさせていただきたいと考えています。ご協力のはど宜しくお願い致します。

1、次の項目におこたえください。

年齢 \_\_\_\_\_ 歳

①あなたの家の家族構成は

大学入学前の家族構成は

1、核家族

2、2世代同居

3、その他( )

小学校入学時の家族構成は

1、核家族

2、2世代同居

3、その他( )

②あなたの兄弟はあなたを含めて何人ですか

\_\_\_\_\_人

③あなたの両親はあなたの幼少時より共働きしていますか

1、いる

2、いない

④あなたの育児に対する考えは、親の影響を受けていると思いますか

1、思う

2、思わない

3、どちらともいえない

⑤将来、希望する職業は

⑥育児を前提にしたとき仕事にたいしてどのように考えていますか

1、仕事はどんなことがあっても続けたい

2、仕事ができれば続けたい

3、仕事は結婚すればやめる

4、仕事は子供が生まれたらやめる

5、わからない



## 3) 分析方法

- ①属性の単純集計を行なう。
- ②SD法の結果は否定的なイメージから肯定的なイメージにいくにしたがって、1～7点を与え、それぞれの形容詞対について平均値、標準偏差を算出する。
- ③30項目の形容詞対についてバリマックス法による因子分析を行なった。

## 3. 結果

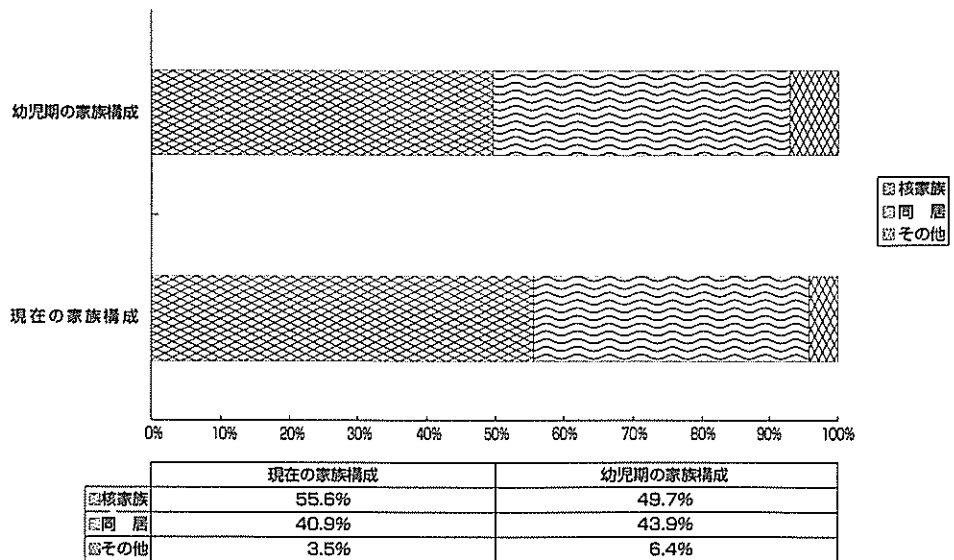
## 1) 対象者の属性

年齢は18歳～25歳までの女性で、平均年齢は20.8歳である。

## 2) 家族構成

現在の家族構成と幼児期の家族構成は、核家族が約半数を占めている。図1の通りである。現在と幼児期の家族構成は幼児期同居していたが現在は核家族になったもの、中途同居になったものなどで数値的に変化はみられるが、核家族の比率は現在の家族構成の方が5.9%高い。

図1. 現在と幼児期の家族構成



## 3) 兄弟数について

平均兄弟数は2.42人と全国平均数とおおよそ合致している

## 4) 幼少時の共働きの有無

幼少時に母親が働いている家庭は42.1%であり、していない家庭が57.9%であった。

## 5) 育児に対する考えの親の影響

親の影響を受けていると思うものが60.8%、思わないが13.5%であった。何らかの形を持って親の影響は見られる。

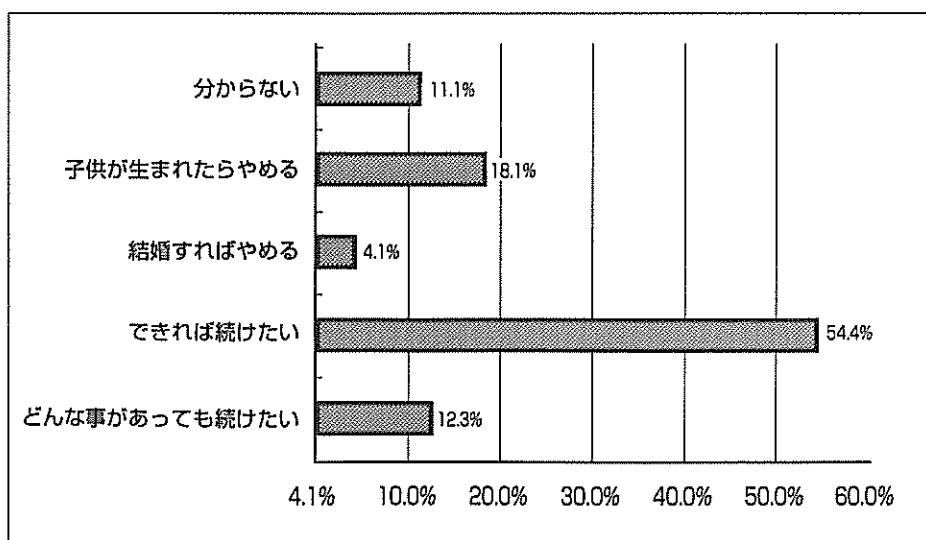
## 6) 将来の希望の職業

対象学生が教育学部と介護福祉士養成校の学生のためであって、職業はその資格を生かすものが当然ながら多かった。

## 7) 仕事の継続性について

将来どんなことがあっても続けたいとするものは意外に低く、12.3%であった。対象学生は卒業後、免許や資格を有することができる学生であることから、職業意識については仕事の継続性は高いと考えていたが、やや消極的な、できれば続けたいとするものが54.4%と最も多かった。結婚や出産を契機にやめるとするものは22.2%であった。

図2. 仕事の継続性

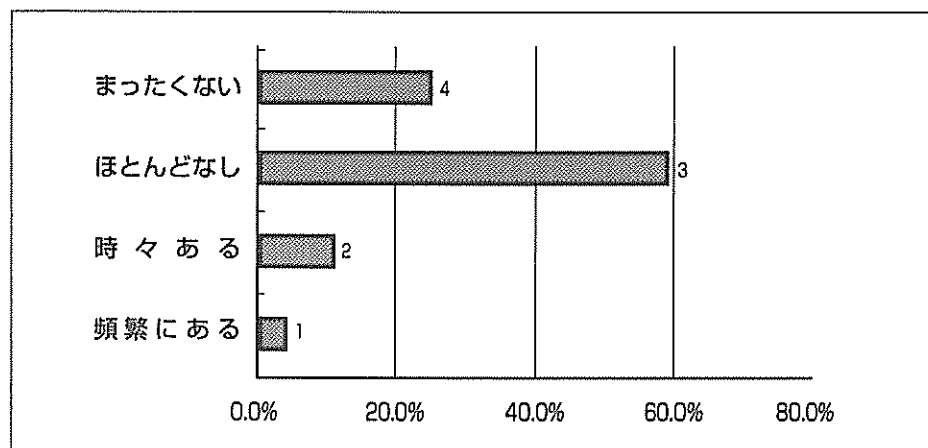


## 8) 乳児との接触の機会

乳児と接触する機会は、84.7%の学生がほとんどない、もしくは全くない状態である。現在の若者は乳児と接する機会はほとんどないと考えられる。頻繁にあるとする7名の学生は、身近に身内の育児により接する機会があるというまれなケースである。

図3. 乳児との接触の機会

頻 繁 に あ る	7	4.1%
時 々 あ る	19	11.1%
ほ と ん ど な い	102	59.6%
ま っ た く な い	43	25.1%
合 計	171	100%

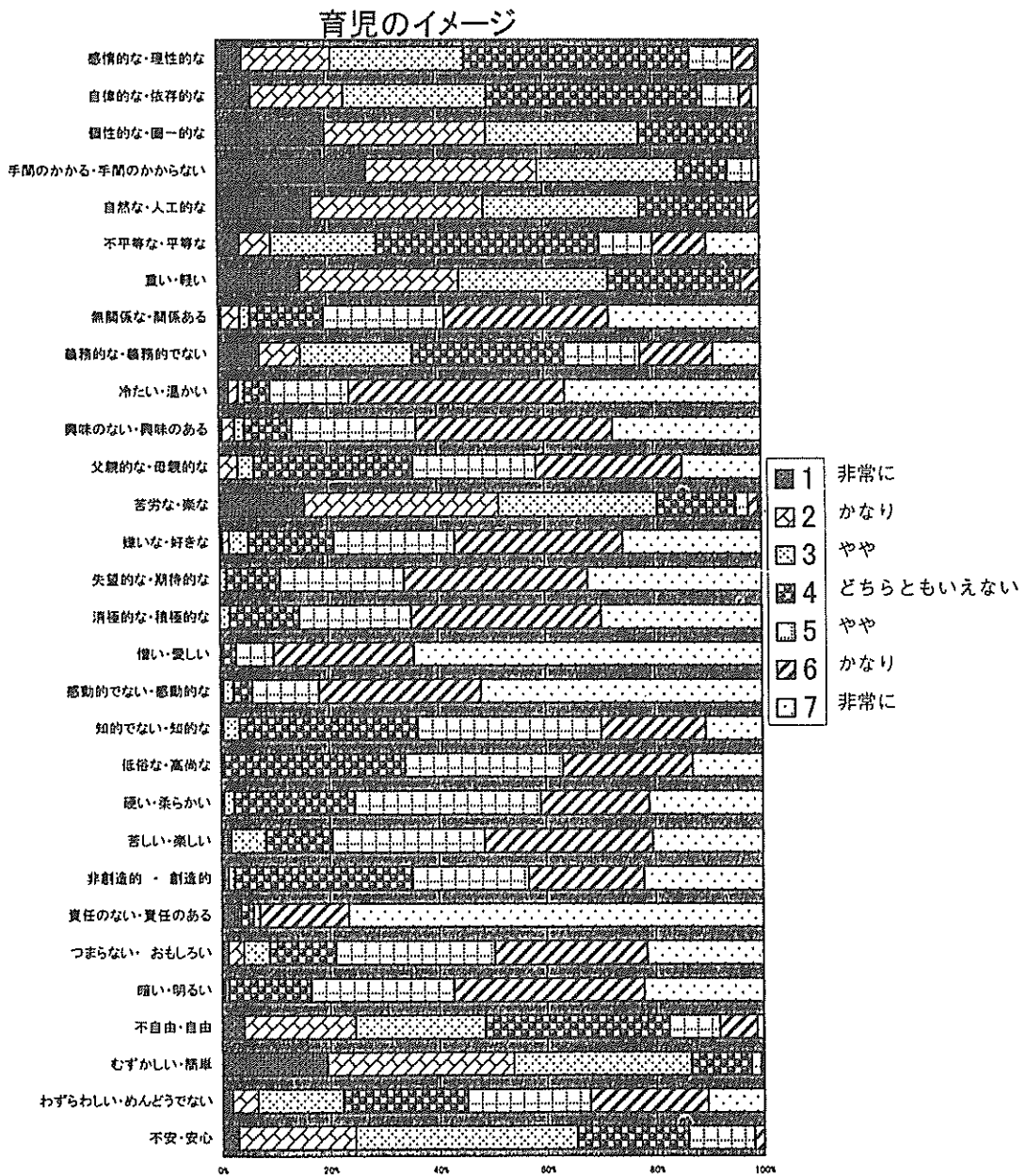


## 9) イメージについて

### (1) 各項目毎のイメージについて

30項目の形容詞対の中で、7段階の評価でマイナスイメージになっている項目は「不安」、「むずかしい」、「不自由な」、「苦勞な」、「重い」、「手間のかかる」であった。これらのなかで「むずかしい」ととらえている人が87%、「手間がかかる」が85%、「苦勞な」と感じている人が81%、「重い」が71.9%、「不安」が65.4%、「不自由な」が49%である。その反面、赤ちゃんをイメージすることから、「明るい」、「おもしろい」、「楽しい」、「柔らかい」、「感動的な」、「愛しい」、「温かい」とするプラスのイメージにつながっている。また、未来的なこととして、「責任のある」、「創造的な」、「高尚な」、「知的な」、「積極的な」、「期待的な」、「好きな」、「母親的な」、「興味ある」、「関係ある」ものとしてとらえられている。

図4. 各項目の育児のイメージ



さらに、項目毎にみていくと「不安—安心」では、やや不安が最も多く、40.9%が漠然として不安に感じている。「わずらわしい—めんどろでない」では、育児に対してのわずらわしさは少なく、54.9%の人がわずらわしさを感じていない。「むずかしい—簡単」では、86.5%の人が育児のむずかしさを感じている。「不自由な—自由な」では、育児では自己の自

由さが少なくなることから、不自由とするイメージが44.6%を占めている。「暗い—明るい」では、育児は全体的に明るいイメージが強いが、16.4%が暗いイメージを持っている。このことは気になることである。「つまらない—おもしろい」では、育児に対しておもしろいという期待感的イメージを持っている人が78.9%を占めた。「責任のない—責任のある」では、ほとんどが育児は責任のあるものとしてとらえている。「非創造的な—創造的な」では、未知なるもの、未来への創造性のイメージが64.9%であるが、どちらともいえないが32.7%を占めた。「苦しい—楽しい」では、79.6%の人が楽しいというイメージをもっている。しかしわずかではあるが非常に苦しいものととらえている人もいる。これは、子どもの好き嫌いにも関係している。「硬い—柔らかい」では、赤ちゃんのイメージから柔らかいとするものが75.5%であった。その他はどちらともいえないとするものが22.2%であった。「低俗な—高尚な」では、どちらともいえないと答えたものが33.3%であるが、人間を育てるということに意義あるものとして価値を認めているものが多い。「知的でない—知的な」では、どちらともいえないが32.7%であるが、大半は育児は知識も必要とするものであるととらえている。「感動的でない—感動的な」では、子どもの成長の中で体験する喜びなどから感動的なものとしてとらえている。「憎い—愛しい」では、乳児の愛らしいイメージから連想するように、97%が愛しいと答えている。「消極的な—積極的な」では、女性には出産育児は当然なことから、積極的に関わろうとしている姿勢が見られる。「失望的な—期待的な」では、将来の出産育児に対する期待感が強い。「嫌いな—好きな」では、母性的本能として比較的育児を好むという傾向が見られる。「苦勞な—楽な」では、子どもを育てることは大変で苦勞なこととしてとらえている。「父親的な—母親的な」では、育児は母性と密着したものであり、母親との関係が強いものであることが現れている。しかし、どちらともいえないが29.2%であり、父親も育児に参加すべきという社会の流れの影響が考えられる。「興味のない—興味ある」では、女性として育児は密接な関係があり、興味あるものとしてとらえられている。「冷たい—温かい」では、90.7%が温かいものとしてとらえている。「義務的な—義務的でない」では、育児の義務感としては、どちらともいえない曖昧さが強い。「無関係な—関係ある」では、女性として将来的なことを想定して関係あると答えたものが80.9%である。「重い—軽い」では、人間を一人前に育てるという重みから否定的なイメージが強くなっている。「不平等な—平等な」では、女性の立場から考えた時に、育児は性別役割の強いものであるため、不平等のイメージが強く現れている。「自然な—人工的な」では、育児は自然な営みととらえられている。「手間のかかる—手間のかからない」では、子供を育てることは労力と時間をかけて行なうものであることから、手間の掛かるという否定的イメージが強い。「個性的な—画一的な」では、子どもは個性的なものであることから、育児は個性的なものであるととらえている。「自律的な—依存的な」では、育児は他人を頼るのではなく自己を



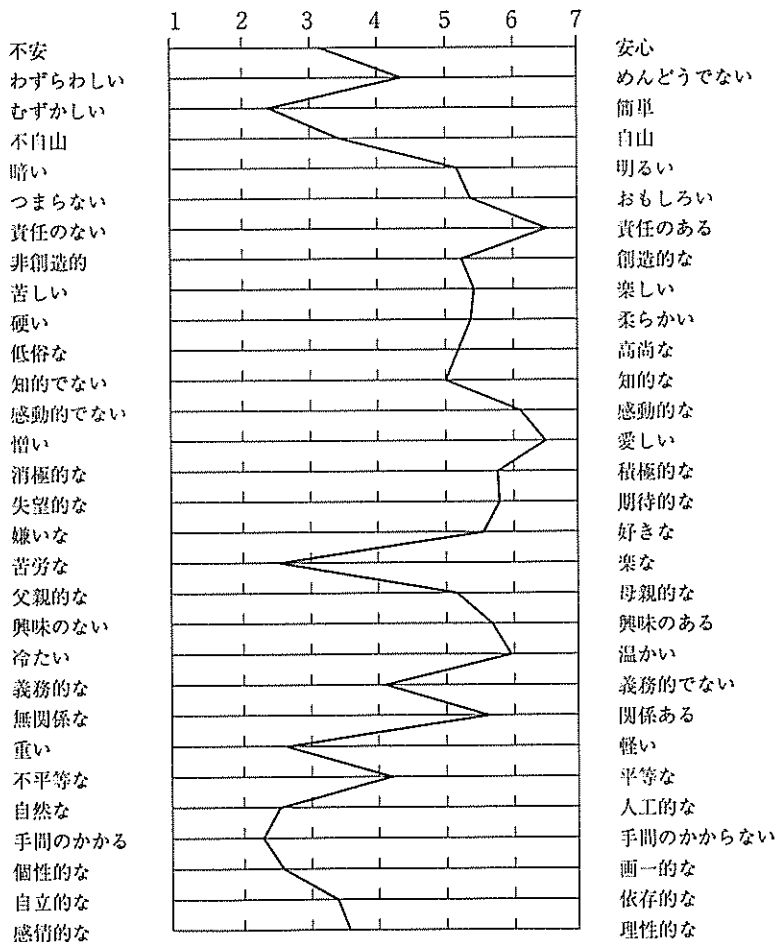
律して行なうものであるととらえられている。「感情的な—理性的な」では、育児は泣いたり笑ったりと感情的な面があり、また本能的衝動的なものとしてとらえられている。

## (2) イメージの平均得点について

イメージの平均得点でとらえてみると、得点の低いものは、「手間のかかる」、「むずかしい」、「重い」、「苦勞な」、「不安」、「個性的な」である。これらは精神的身体的な要素であり、何らかの対策を講じれば変化していくものでもある。得点の高いものは、「愛しい」、「感動的な」、「責任のある」、「積極的な」、「期待的な」、「温かい」、「明るい」などである。これらは、母性としての意識や乳幼児から作られてくるイメージである。

イメージ全体としては、肯定的にとらえられている。女性として、将来的に子育てを身近なものとしてとらえてきている。

図5. イメージの平均得点



## (3) 因子分析

バリマックス法による直交回転を行ない、因子数を 8 因子から 4 因子までの分析を行なった。その中で因子数が 5 因子の時に最も良い結果が得られた。なお、その過程において「不自由な—自由な」、「自然的な—人工的な」、「自律的な—依存的な」、「感情的な—理性的な」の 4 形容詞対は、どの因子にも負荷量が低いため除外した。26 項目の因子分析の結果は表 2 に示す通りである。

表 2. 因子分析

回転後の成分行列

イメージ	成分				
	1.0000	2.0000	3.0000	4.0000	5.0000
憎い—愛しい	0.7251	0.2175	0.0101	0.0108	0.1732
消極的な—積極的な	0.7204	0.1814	-0.0217	0.2543	0.0326
無関係な—関係ある	0.6894	0.0566	-0.0540	-0.0366	0.0158
失望的な—期待的な	0.6840	0.1519	0.1267	0.1520	0.0354
嫌いな—好きな	0.6452	0.4271	0.3091	-0.1065	-0.0723
感動的でない—感動的な	0.6137	0.1880	0.0932	0.2341	0.3561
興味のない—興味ある	0.6089	0.3805	0.2445	-0.1859	-0.0109
冷たい—温かい	0.5300	0.2797	-0.0756	-0.2361	0.0506
個性的な—画一的な	-0.5115	-0.1933	0.1687	-0.2233	-0.0932
苦勞な—楽な	-0.4896	0.3087	0.2531	0.0289	-0.3253
非創造的な—創造的な	0.4705	0.1355	-0.0204	0.4025	0.1331
苦しい—楽しい	0.1390	0.7402	0.2534	0.1297	0.1450
硬い—柔かい	0.1980	0.6663	-0.1078	0.0538	0.0388
暗い—明るい	0.2919	0.6655	0.2833	-0.0289	-0.0335
不平等な—平等な	0.1131	0.4999	-0.1979	0.0347	-0.1088
つまらない—おもしろい	0.2883	0.4941	0.3414	0.0056	0.4916
不安—安心	0.2069	0.1510	0.7244	0.0360	-0.1411
むずかしい—簡単	-0.0945	-0.1124	0.6290	-0.0436	-0.0110
わずらわしい—めんどろでない	0.3506	0.4013	0.5098	-0.0421	0.0514
軽い—重い	-0.4184	-0.0066	0.4996	-0.0433	-0.0134
知的でない—知的な	0.1254	0.1776	-0.0247	0.7409	-0.0106
父親的な—母親的な	0.1191	0.1922	-0.0100	-0.6165	-0.0430
低俗な—高尚な	0.3575	0.3957	-0.1593	0.5388	-0.1338
責任のない—責任のある	0.1658	-0.0464	0.1101	0.0376	0.7482
義務的な—義務的でない	0.0723	-0.0702	0.2859	0.0911	-0.5715
手間のかかる—手間のかからない	-0.2924	0.1233	0.3808	-0.2056	-0.4806
因子負荷量の2乗和	5.0210	3.0710	2.2890	1.7580	1.7370
寄与率(%)	19.3110	11.8110	8.8030	6.7630	6.6800
累積寄与率(%)	19.3110	31.1220	39.9250	46.6880	53.3670

因子 1 で高い負荷量のあった「愛しい」、「積極的な」、「関係ある」、「期待的な」、「好きな」、「感動的な」、「興味ある」、「温かい」、「個性的な」、「苦勞な」、「創造的な」からは、女性として将来育児に関わるものとしてイメージされているので女性の将来的展望因子と命名した。次に因子 2 で高い負荷量のあったものは、「楽しい」、「柔かい」、「明るい」、「平等な」、「おもしろい」である。これらからは、子どもの姿や子どもに接することから連想した

イメージであることから、子どもの現実感的因子とした。さらに因子3について高い負荷量のあったものは、「安心」、「簡単な」、「めんどろでない」、「重い」であった。母性として育児を考えた時に当然のなすべきこととしてのイメージ感であるため、母性的養護因子とした。因子4について高い負荷量のあったものは、「知的な」、「父親的な」、「高尚な」からは育児をしつけれ、教育的要素からとらえている。このことから、育児の理性的教育因子とした。さらに因子5で負荷量の高い「責任ある」、「義務的な」、「手間のかかる」からは、女性が子どもを一人前に育てるという社会的義務感からのイメージとしてとらえられる。そこで、社会的義務因子と命名した。

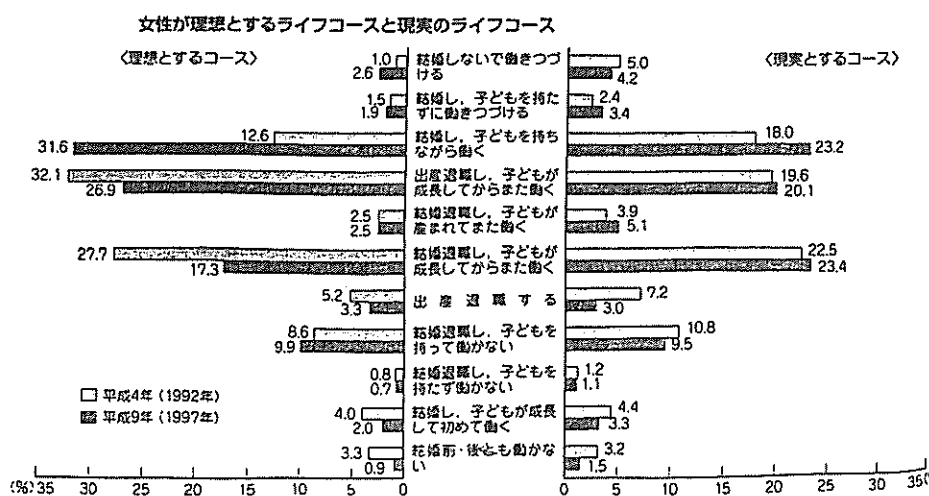
#### 4. 考察

##### 1) 女性の仕事の継続について

女性の生き方や仕事を持つことの方針については、今回のアンケートの中からは分析することができないが、一般の若い女性が仕事の継続をどのように考えているかはつかむことができた。また、仕事の継続とイメージの関係を見てみたが有意差が認められなかった。

女性が理想とするライフコースと現実のライフコース（図6）と比較してみると、どんなことがあっても続けたいが12.3%、できれば仕事は続けたいとするものが54.4%であり、女性の意識がかなり変化してきている。しかし現実的には結婚して子どもを持ちながら働くという事は諸事情から困難が伺える。女性も仕事を大事にしていきたいという思いは強くなってきている。

図6. 女性が理想とするライフコースと現実のライフコース



注: 1 平成4年調査の対象は、20～44歳の女性3,000人。平成9年調査対象は母集団のうち20～44歳の女性1,174人。

2 生命保険文化センター「女性の生活意識に関する調査」、1992年と経済企画庁「国民生活意識調査」、1997年により作成。

資料: 経済企画庁「国民生活白書」1997

## 2) マイナスイメージから

育児のマイナスイメージは、「不安」、「むずかしい」、「不自由な」、「苦勞な」、「重い」、「手間のかかる」の6項目であるが、一つ一つの項目を検討してみる。育児に対する「不安」は、子育てに関する技術や知識不足などからくる自信のなさ、未知なるものへの漠然とした不安である。「むずかしさ」は子どもに接する機会が少ないことから、子どもをどう扱ったら良いかわからない、子育てに対して億劫になっていることがうかがえる。「不自由さ」からは、子育ては自分の時間が持てず、自由がなくなり子ども中心になった生活を強いられることからと考えられる。「苦勞な」ということは、子育ての大変さを見聞かしていることや、親への思いを振りかえることによって生じてくる。育児の「重み」は、人を育てることの責任や大変さ、やりがいさからきている。「手間がかかる」ということは、子育ては一朝一夕ではできない簡単なことではないとか、骨身を惜しまないでやらなければならないということからでていると考える。マイナスのイメージは子どもを生まない、持たないという少子化の要因につながっていくので改善策を講じなければならない。マイナスイメージを改善するためには、育児体験として抱っこしたり、乳児のおむつを変えたり、ミルクを飲ませたりという世話をさせていくことが必要である。こうした子どもとふれあう中で愛しい、楽しい、かわいい、柔らかい、温かい、明るいというプラスのイメージに切り換えられ、マイナスのイメージが薄くなっていくことにより、母性意識が高められていく。

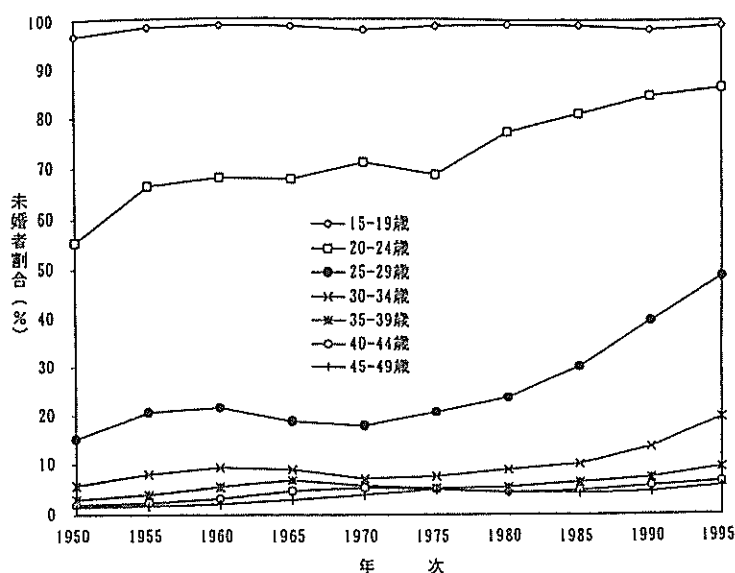
## 3) 因子分析からとらえた育児の課題

イメージ調査から因子分析をしてみても、五つの因子が引き出されてきた。女性の将来的展望因子では、寄与率19.3%で最も高かった。女性として結婚、出産、育児という一般的なライフコースを思い描くことにより、導かれるイメージであり、因子の中では最も多い10項目があげられる。

女性の結婚の変化をみてみると、20歳代後半の未婚率は、1970年は18.1%であったが、1995年には48.0%と急増している。(図7) また、夫婦の生む子どもの数にはここ数年2.2人前後とほとんど変化がみられない。それにも関わらず合計特殊出生率は低下してきている。このことから少子化は20歳代の若者が結婚しなくなったこと、あるいは晩婚化したことにより起きているといわれている。女性が結婚しない理由としてあげられているものは、適当な相手がみつからないが6割を占め、次に多い理由は自由や気楽さを失いたくないで、4割を占める。また、出生率低下の原因として、子育ての費用の負担が大きいため、育児を容易にする施設が十分ではないから、結婚するのが遅くなったから、結婚しない人が増えたからと、30歳代の既婚女性は答えている。女性が将来展望を描い

た時に明るい未来が描けるものでなければならない。女性の生き方が多様化してきている中で、子どもを生み、育てるという大きな役割を社会がバックアップして支援していくことが急務である。

図7. 女子の年次別年齢別未婚者割合



資料：総務庁「国勢調査」各調査版

子どもの現実感的因子は、子どもの姿を連想することで、あるいは子どもに接することで生まれてくるイメージである。しかし、ここでいう子どもとは乳児というより幼児期以降の子どもの姿に影響されていると思われる。負荷量の高かった「楽しい」、「明るい」、「平等」、「おもしろい」は、そうした子どもの姿からイメージが描かれる。子どもをほしくないと思っている人ほど、子どもを否定的にとらえており、子どもの存在の意味を理解していないと言われている。子ども観、育児観には、子どもの存在と密接な関係がある。思春期までに子どもの世話の経験があるものの方が、子どもに対する意識が強い。子どもがいることの楽しさを知る機会を与えるために、子どもに接する機会を何らかの形で設けていくことは必要である。

母性的養護因子としては、持って生まれた女性の母性という本能的なものからきているものとする。女性の結婚・出産・育児という一般的ライフコースのなかでとりわけ育児については母性との関係が深い。乳児から引き出されるイメージと母性としての使命感や役割が感じられる。この因子は乳幼児と接する体験の有無と相関関係をみたところ、有意差が認められた。(表3) 母性意識は乳幼児と接することによって高まってくる。

表 3 - 1 . 等分散の検定

		等分散性のための Levene の検定	
		F 値	有意確率
REGR factor score 1 for analysis 1	等分散を仮 定する。 等分散を仮 定しない。	.133	.716
REGR factor score 2 for analysis 1	等分散を仮 定する。 等分散を仮 定しない。	1.048	.307
REGR factor score 3 for analysis 1	等分散を仮 定する。 等分散を仮 定しない。	.540	.463
REGR factor score 4 for analysis 1	等分散を仮 定する。 等分散を仮 定しない。	2.059	.153
REGR factor score 5 for analysis 1	等分散を仮 定する。 等分散を仮 定しない。	2.153	.144

表 3 - 2 .

因子と乳幼児との接触の機会

	F値	t値	有意確率
因子1	0,133	1,474	0,142
因子2	1,048	0,940	0,349
因子3	0,540	2,758	0,006
因子4	2,059	1,330	0,185
因子5	2,153	-1,143	0,225

p&lt;0,05

母性意識を増強させていくためには、乳幼児との接触の機会を多くする必要がある。乳幼児と接する中で得た感動や幼い子達への思いやりや慈しみの心をもつ体験から、母性が育っていく。現在でも小中学校や高校で取り組んでいる保育園実習等は積極的に取り入れていく必要がある。母性としての意識が高まることにより育児に対して安心感を持ち、育児を楽しみながら行ない、めんどくさは減少するであろう。

理性的教育因子は、子どもを一人前に育てるという教育的側面から引き出された。子どものしつけの悩みは多くの親が持っているが、本調査からしつけの部分では父親に期待するものがみられている。特に学歴社会の中で受験へと駆り立てられてきた若者も、

育児の教育的要素に対して少なからず不安を感じている。社会としてできるだけ子供を育てていくストレスを軽減していかなければならない

社会的義務因子は、女性としての性別役割が大きく影響している。子育ては女性がになうものとしてとらえられているから、責任性を感じ、義務として受け入れている面が明確になった。育児は女性だけがになうものではないと理解していても、潜在的には女性の社会的責任としている面がある。この潜在的拘束感が育児のストレスにつながったり、育児に費やす時間や負担を考えて子どもを持とうとしないことにつながっている。女性の潜在的性別役割意識を女性自らが自覚し、社会に対して男女共生を働きかけなければ変わっていかないであろう。

## 5. まとめ

育児に対する若い女性のイメージ調査をしてみて、比較的育児に対してはプラスのイメージを持っていることがわかった。少子化をもたらしている晩婚化や非婚化の要素が含まれているのではと考えて調査を行なったが、イメージの中からはその関係を見いだすことはできなかった。しかし因子分析をしてみて、日本の社会の、ものの考え方が女性の意識の中に根づいていることを知らされた。特に女性の性別役割意識は潜在的にあることがわかった。また女性の中の母性意識を高めていくことの重要性が明確になった。そのためには思春期の頃より子どもと触れ合う機会が必要である。もっと積極的に子どもと触れ合う機会を作り子どもを理解することが育児においても重要になってくる。

これからの少子高齢社会をより良いものにしていくために女性の力は大きいものである。若い女性が育児について、そして、介護についても社会に対して自分達の声を上げていくことが大切である。

## 6. おわりに

本研究に際して因子分析の指導を賜った、信州大学医療技術短期大学看護学科百瀬由美子先生に深く感謝致します。

## 引用・参考文献

- 1) 中川英一：若い女性の結婚観と育児観 母性衛生 第39巻2号 P232～237 1998
- 2) 石井邦子・森恵美：妊娠・育児の体験が女性の共感性に与える影響について 母性衛生 第40巻1号 P103～108 1999
- 3) 庄司順一：少子化についての専門的研究 母子健康情報 第37号 P94～95 1998

- 4) 佐々木正美：子育て不安と児童虐待への援助 母子保健情報 第33号 P29～33  
1996
- 5) 庄司順一・谷口和加子：育児不安 健康の科学 第40巻4号 P289～292 1998
- 6) 平山守宏：少子化問題を考える 子どもの家庭福祉情報 第14号 P2～3 1998
- 7) 高橋重郷：少子化と将来の人口予測 子どもの家庭福祉情報 第14号 P4～10  
1998
- 8) 中村敬：少子社会と子育て支援 子どもの家庭福祉情報 第14号 P45～52 1998
- 9) 森田明美：少子社会と子どもの育ち 子どもの家庭福祉情報 第14号 P58～61  
1998
- 10) 今井省吾：日本大百科全集2 小学館 P608 1998